若者の就業支援と協同労働

藤井 智（文化学習協同ネットワーク）

1.はじめに〜私たちの自己紹介

「文化学習協同ネットワーク」は、子育て教育支援と青年の社会的自立支援という2つのテーマを持つ、教育NPOです。今から30年ほど前の1970年代、「落ちこぼれ」というコトバがひろがりはじめたころ、地域の父母たちの教育要求にもとづく「塾づくり運動」に端を発します。

現在は、その運動の流れをくむ、地域の「もうひとつの学びの場」の支援と、不登校の子たちのためのフリースペース「コスモ」の運営を、日常の活動の柱にしています。また、青年や学生たちが中心となって編集する季刊雑誌『カンパネルラ』の発行や、年に一度の大きな文化企画、サマーキャンプやスキー合宿の企画運営などに取り組んでいます。

私はその中でも、とくに10代後半から20代前半の青年たちと接することの多い分野で活動しています。どちらかというと「学校化社会の競争原理」の中で、「優位」には立てなかった青年たちや、そもそも競争から「おりて」しまった青年たちとの関わりが多くなっています。

彼らの社会的な自立をどう支えていくか。ここ数年、私の意識はずっとそのことに向かっています。

2.青年たちと接して思うこと

青年たちは、「仕事人間」「会社人間」などといわれる親世代に、自分の将来像を重ね合わせることに、明らかにためらいを感じているように思います。しかし同時に、それに代わるあたらしいライフイメージをも描けないでいる現状ではないでしょうか。

「くらし」のシーンと「はたらく」現場が別々になることで、子ども時代から大人が働く現場を身近に感じることができなくなってきています。「こんな大人になりたいな」とか「こういう人ってステキだな」といった「あこがれ」が育ちにくい状況です。

コミュニティーの中での役割を果たしながら、自分と社会とのつながりや役割を実感していくことも、なかなかできづらい状況です。「子どもが失業状態だ」と表現する人もいるほどです。彼らは、消費行動のなかで、辛うじて自分を表現しているようにも見えます。

それともうひとつ、私が彼らと接していて痛切に思うのは、現代社会が子どもや青年たちにとって、「おどし社会」ともいえる様相を呈しているのではないかということです。彼らは随分と長い間、大人や社会からの叱咤や「おどし」にさらされてきているように思います。絶えず「がんばる」ことを求められる雰

囲気の中で生きてきたし、「がんばらなくっちゃ生きていけないんだよ」という「追い立て」の中で生きているように思うのです。

「学校でちゃんとやりなさいよ」「中学校はもっと厳しいんだよ」「高校受験は大変なんだよ」「そんなことじゃ社会にでて困るんだよ」「そんなんじゃ生きていけないよ」「実社会は厳しいんだよ」等々。

そういった「おどし」を受け続けると、世の中に対する「おそれ」や「恐怖心」が蓄積されていって当たり前でしょう。なんでそんなにおどし続けるんだろう、社会ってそんなに「おそろしい」ところなのでしょうか。

そういった「自立しにくい」仕組みの中で、彼らは生きているように私には思えるのです。

3.協同の労働への思い

「自分はなにをしていったらいいのか分からない」という思いは、多かれ少なかれ、現代青年に共通の思いではないでしょうか。自分自身をみつけていくことも、根本的には他者との関係のなかでされていくはずです。彼らの自分探しや自分づくりを支えていくことも、本来的にはコミュニティーを再生していくことなしには考えられないと思うのです。

コミュニティーの中で、ひとりひとりが役割を果たしながら、批判され、評価され、自分の位置を確認していく。きっと、そうやっていくことで、はじめて自分というモノをたしかなものにしていくのでしょう。

私は、「おどし社会」のなかで社会に対する「おそれ」を余儀なくされている彼らに対して、「そんなにおそれることないんだよ、君だってやっていけるよ」「だいじょうぶだよ、きっと一緒に生きていけるよ」というメッセージを、現実味を持って伝えていきたいと、常づね思っています。

それはきっと「協同のはたらき方」が、現実社会に根付いてくるなかで、リアリティを持っていくのだと思います。競争社会の中で、他者とあらそいながら仕事をしていく、従来型のはたらき方や就労構造、あるいは「自分で力をつけなさい、条件はそれなりに与えます。あとは自分の責任です。ダメは人は生きていけないんだよ」といった、新自由主義的な考え方のもとでは、人は絶えず追い立てられ、絶えず勝利することを求めれてしまう。たしかにそんな社会は「こわいところ」でしょう。

そうではなく、協同のはたらき方の中で、人間への信頼や将来への展望もひらけてくるのではないでしょうか。人と人とが競争し、争いあいながら経済活動を行っていくのではなく、手をつなぎ、つながりあっていくことで仕事をつくっていく、そんな「あたらしいはたらきかた」をひろげていくことが、本当に求められていると感じます。

4.「STW」と「カンパネルラ」

今年開催した「SCHOOL TO WORK～これからの働き方発見セミナー」は、そういった「協同のはたらき方」をより多くの青年に発見してほしい、出会ってほしい、そしてできればそういう生き方を、ともにつくっていってほしいという思いで企画されました。

セミナーは全6回、環境ビジネス・メディ

ア・手仕事・福祉・NGO・食の6つの分野で、協同をひろげながら自分らしく働く青年たちに、各回の講師として来ていただきました。時には実際に仕事内容を体験しながら、時にはワークショップ形式で、講座は進みました。

各界の最先端を走るトップランナーではなくて、それなりに身近な、等身大の少しだけ前を行くセンパイたちの方が、青年たちにとってはあきらかに説得力があるのでしょう。「そういう生き方、自分にもできるかも知れない」「それって今までのはたらき方と違うけど、けっこうイケテるかもしれない」という思いから、できればこのセミナーがきっかけとなって仕事おこしができればいいなぁと思っていました。

それは、講座で紹介したような内容の仕事づくりかもしれません。もしくはそんな講座をつくっていくことそのものを、ペイのできる仕事としてつくりあげていくことにつながるのかも知れません。色いろなかたちでの実現をしていきたいと、想いはひろがります。

今回の講座ではさすがにそこまでは至りませんでしたが、来年度もまた内容をよくよく考えながら、この講座を開催していきたいと思うのです。

私たちの発行する「新しい生き方・つながり発見マガジン」と銘打った季刊雑誌『カンパネルラ』（ふきのとう書房）は、生き方や働き方を見つけていきたい青年学生たち自身が、企画・取材・編集・発行する雑誌です。

編集委員会に参加する青年が、色いろな生き方に触れながら、それを記事にしていきます。できあがった雑誌を、全国400名近くの私たちのNPO組織の会員が、まわりに広げていきます。時には注文をつけたり批判したりしながら、そうやって大人たちが彼らの活動を支えています。

「あたらしい」「協同」の生き方や働き方を学び、取材して発行する仕事を、文化学習協同ネットワークという名の使命共同体というコミュニティが、つくりあげ、支えていっているといったら、自画自賛がすぎるでしょうか。

いずれにせよ、そんな協同のあり方を、少しずつ具体的なモノにしていこうと、私たちも奮闘中なのです。

5.おわりに

今月の5日付朝日新聞で、「協同の思想―経済の第3の担い手に」という社説がありました。ちばコープと労働者協同組合（ワーカーズコープ）をあげながら、共感、参加、そして協同の論理による経済活動が、「市場か政府か」といった論議に一石を投じているのではないか、第3の担い手として育てられないか、と論じています。

本当にそうだよなぁ、協同の論理による経済が、日本経済の中で確実に位置付いていったら、きっと青年たちも、子どもたちも、社会に対して「おそれ」や「ふあん」ではなくて、「あこがれ」や「きたい」をもてるようになるよなぁ、と思うのです。そんな流れに身を置いている自分って、「うん、ちょっとカッコいいかもしれない」と思っちゃったりしているのです。